

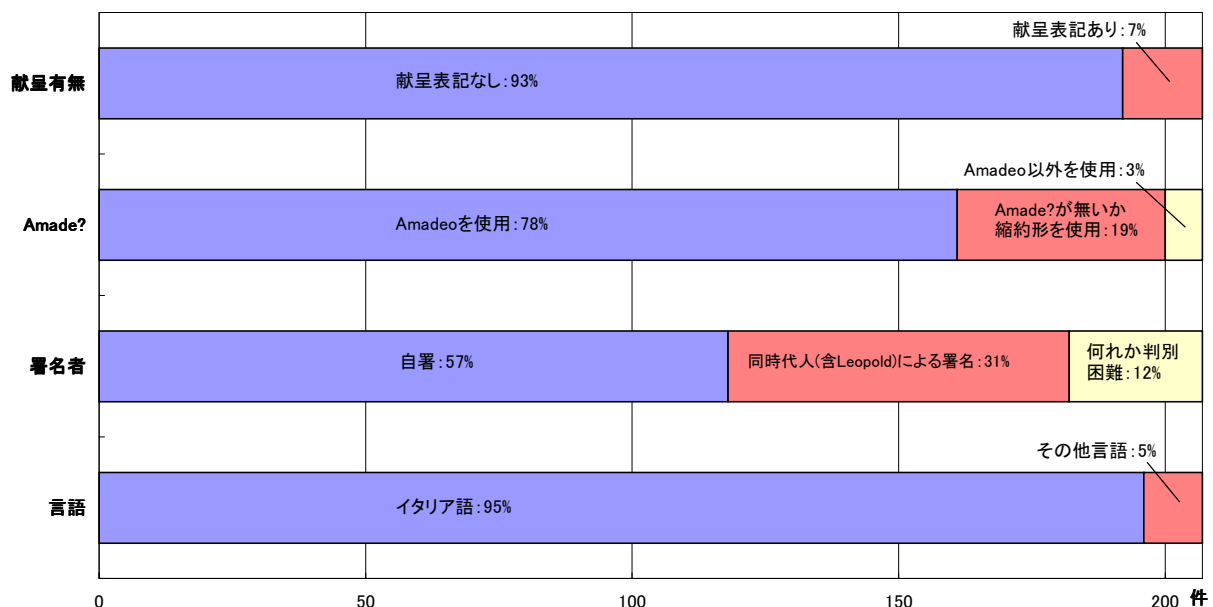
Wolfgang Amade? Mozart その 1：手稿譜における署名の状況

要旨：ヨーロッパの諸国を巡ったモーツァルトは旅の空の下で作曲し、献呈の辞をその国の言語で書いたのであろうが、署名はどのように記したのであるか。またどのように発音されたのであるか。モーツァルトは自らの自筆譜に Wolfgang Amadeus Mozart と署名したのであるか。

1. 調査対象と統計結果

現在残っているモーツァルトの曲の手稿譜から署名のある 207 件（自筆譜以外にレーオポルト・モーツァルトやマルティーニ神父の筆写譜も含む。なお 1 曲に複数の署名がある場合もあるため件数でカウントした）を抽出し、ケツィエル第 6 版、新モーツァルト全集の序文や校訂報告から署名の状況を統計的にまとめた^{注1}。次の表がその結果である。

表 1 モーツァルトの楽譜における署名の状況
(署名のある207件について)



2. Amadeo とはペンネームか?

楽譜において初期には Wolfgang Mozart あるいは Wolfgango Mozart と（レーオポルトの代理署名を含む）署名していたが、1767 年に K.35a(42)でレーオポルトが Wolfgango Amadeo Mozart と署名した^{注2}のを皮切りに 1770 年に K.73p(83)でモーツァルト本人が amadeo Wolfgango Mozart と署名している。以後イタリア旅行後ウィーン時代に至るまで満遍なく Amadeo が使われており、1791 年の K.618 でも Wolfgango Amadeo Mozart が使われているなど、Amadeo が使われる件数は全署名中の 78%を占めている。

Amadeo は洗礼名中のファーストネームの一つである Theophilus のラテン語形 Amadeus のさらにイタリア語形である。レーオポルト・モーツァルトはイタリアで一旗挙げるため息子に当該語のペンネームを付けたのであるか。

3. イタリア語は楽譜に用いられる共通語

速度標語、発想標語そして省略記号などに例外なくイタリア語が使用されているのはモーツァルトの楽譜では当然と思われるであろうが、さらに、曲名（記載無いものも多い）作曲年・作曲地などがイタリア語で書かれているのが 95%を占めている。従って、その場合は署名もイタリア語として次のように発音されるべきであろう。

Wolfgango Amadeo Mozart : **ヴォルフガング・アマデーオ・モッツァルト**
(あるいは**ヴォルフガング・アマデーオ・モツァルト**)

注：太字はアクセントのある音。イタリア語ではアクセントのある母音を強くよりもむしろ高く発音する。

モーツァルトの時代は楽長職にイタリア人が圧倒的多数を占めていたため、その職にあやかるために自らの名前もイタリア名にする風潮があった。その目的にも一致するこの名前はペンネームと言うよりは、実名のイタリア語表記という方が正しいであろう。

4. Amadeo 以外にどのような変形があるか？

(1) Amadè 表記が K.417、K.487、K515b(228)、K.574、K.619 に見られる。従来ケツヒェル第 6 版や新モーツァルト全集の一部では Amadé と表記されてきたものだが、ファクシミリから Amadè が正しいと確認できる（K.574 は未確認であるが、編集者の思い込みは恐ろしいものであると痛感^{注3}）。これらはドイツ語文中及び英文中での表記である。

- ・ K.487 には Von Wolfgang Amadè Mozart [mp?] Wien den 27^{ten} Jullius 1786 untern / kegelscheiben「ヴォルフガング・アマデー・モーツァルト自筆による。ウィーン、1786年7月27日、ケーゲルシュタットをしながら」とある。
- ・ K.417 には Concerto. / Wolfgang Amadè Mozart hat sich über den Leitgeb Esel, Ochs, und Narr, erbarmt / zu Wienn den 27^{ten}: May 1783「協奏曲、ヴォルフガング・アマデー・モーツァルトはロバ、牛、馬鹿のライトゲープを哀れむ。ウィーンにて、1783年5月27日」とありロイトゲープのために作曲されている^{注4}。
- ・ K.574 には Zum Zeichen wahrer ächter Freundschaft, / und br: Liebe, / Wolfgang Amadè Mozart mp / Kapellmeister Seiner K: K: Majestät / Leipzig den 16. May 1789「純真な友情と盟友愛のしるしに。皇王室皇帝陛下楽長ヴォルフガング・アマデー・モーツァルト自筆。ライプツィヒ、1789年5月16日」とフリーメイソンのオルガン奏者エンゲルの記念帳に書かれている。
- ・ K.619 には von Wolfgang Amadè Mozart mp / Kapellmeister und k. k. Kammer Komponistor「宮廷楽長及び皇王室作曲家ヴォルフガング・アマデー・モーツァルト自筆による」とあり、フリーメイソンのツィーゲンハーゲン宛てのものである。
- ・ そして K515b(228) には Vienna. the 24 April. 1787. / don't never forget your true and faithfull friend / Wolfgang Amadè Mozart mp. 「ヴィエナ、1787年4月24日。君の真にして誠実な友を永遠に忘れるなかれ。ヴォルフガング・アマデー・モーツァルト自筆。」とジャカンの記念帳に書かれている。

(2) Amadèe 表記が K.371 に見られる。これはフランス語文中での表記である。/Rondeau/ / di Wolfgang Amadèe Mozartmpa / Vienne ce 21 de Mars 1781「ロンドー。ヴォルフガング・アマデー・モザール自筆。ヴィエン、1781年3月21日」。この K.371 と上記(1)及びその他イタリア語以外で書かれた署名^{注5}、そして献呈表記のある 15 件における記載事項を次表にまとめてみよう。

表2 署名にあわせて記述された内容

	イタリア語以外で記述	イタリア語で記述
事務的な内容にとどめられた記述	K.20 : 英語 (署名、日付) K.371 : フランス語 (署名、日付、場所) K.619 : ドイツ語 (署名、肩書き) K.623 : ドイツ語 (署名、日付)	K.256 : 「パルミニ氏に」 K.294 : 「ヴェーバー嬢に」 K.295 : 「ラーフ氏に」 K.296 : 「マドモアゼル・テレーゼに」 K.300b(316) : 「ヴェーバー嬢に」 K.416 : 「ランゲ嬢に」 K.418 : 同上 K.420 : 「アダムベルガー氏に」 K.449 : 「バルバラ・プロイヤール嬢に」 K.453 : 同上 K.505 : 「ストラージェ嬢に」 K.512 : 「フィッシャー氏に」
相手或いは自分のための個人的な記述が含まれる	K.520 : ドイツ語「ラントシュトラッセ、ゴットフリート・フォン・ジャカンの部屋で」 (ゴットフリート・フォン・ジャカンの仲間に) K.521 : ドイツ語「ラントシュトラッセで」 (フランツィスカ・フォン・ジャカんに) K.417 : ドイツ語「ロバ、牛、馬鹿のライトゲープを哀れむ」 (ヨーゼフ・ロイトゲープに) K.487 : ドイツ語「ケーゲルシュタットをしながら」 (演奏者は不明) K.515b(228) : 英語「君の真にして誠実な友を永遠に忘れるなかれ」 (ジャカンの記念帳に) K.574 : ドイツ語「純真な友情と盟友愛のしるしに」 (オルガン奏者エンゲルの記念帳に)	K.248b(250) : 「シュペート氏とエリザベッタ・ハフナー嬢の結婚式のために」 K.249 : 同上

表中の色付け部分は演奏者に読んでもらうために書かれている。逆に色付けのない部分は演奏者宛ではない。このことは K.371 が書かれた相手は日常フランス語を話す人であり、かつ演奏家でない人であろうことを示唆する。さらには、草稿のままに署名しているがその日付は着手日ではなく完成日あるいは納付日であろうと考えられる。その根拠は未完成の K.315f の署名例にあり、そこでは//Concerto per il Cembalo e Violino// di Wolfgango Amadeo Mozartmpia / Mannheim li ... di ... 1778 と日付がブランクになっており、完成時に日付を入れる意図が明確だからである。

- (3) Amadé 表記が K.370b に見られるが、これはカール・モーツァルトによる記述であり、ドイツ語文中での表記である。この表記については次回例会で考察する(この例のみモーツァルトと同時代人ではない人物を取り上げた)

現在残っているモーツァルトの曲の手稿譜には Amadeus と書かれた署名は存在しない^{注6}。

注1 : http://www.hi-net.zaq.ne.jp/buasg502/name_in_manuscript.pdf

注2 : レーオポルトが洗礼名のイタリア語形を Amadeo とするのは自然の流れであるが、これがモーツァルト本人の意向でもあったのかどうか不明。もっとも名前は親が名付けるものではあるのだが。

注3 : 編集者の思い込みの原因については次回考察する。

注4 : 「献呈表記あり」は K.417 の他に K.248b(250)、K.249、K.256、K.294、K.295、K.296、K.300b(316)、K.416、K.418、K.420、K.449、K.453、K.505、K.512 が該当し、全署名件数の 7% に相当する。

注5 : 「イタリア語以外で書かれたその他署名」には上記(1)、(2)、(3)の 7 件以外に以下がある。英語が K.20 に(署名は Wolfgang Mozart)、ドイツ語が K.520、K.521、K.623 にある(署名は W. A. Mozart)、これら 11 件が全署名件数の 5% に相当する。

注6 : モーツァルトの曲の手稿譜に後日記入されたニッセン、研究者、図書館等による呼称は含まない。

ホルンと管弦楽のためのロンド変ホ長調 K.371 は誰のために書かれたか？

「/ロンドー/ / ヴォルフガング・アマデー・モザール自筆 / ヴィエン 1781 年 3 月 21 日」とフランス語で自筆署名のあるこの曲のソリストは従来ヨーゼフ・ロイトゲープ（モーツァルト夫妻はライトゲープと呼んだ）であると考えられてきた。確かに当時ロイトゲープはヴィーンに居たが、次の点からそうではないと言われるようになった。

1. 含蓄あるコンスタンツェの手紙

コンスタンツェは 1800 年 5 月 12 日のヨハン・アントーン・アンドレ宛ての手紙でホルン協奏曲の断片について次のように述べている。「ホルンのロンド、完全にはオーケストレーションされていない。同、管弦楽伴奏付、完全にはオーケストレーションされていない。ホルン協奏曲 第 1 楽章アレグロの草稿。この 8 頁はほとんど完全にオーケストレーションされている。ホルン協奏曲草稿。4 ページだけが書かれている。」

さらにコンスタンツェは 1800 年 5 月 31 日の手紙で「ふざけたタイトルのホルンのロンド。ライトゲープがコピーを私に約束しました。私の信じるどころ、これらの断片は全く出版されておりません。管弦楽伴奏付のホルンのロンド。ライトゲープは全くそれを知りません。従ってそれはフルスコアでは残っていません。第 1 楽章アレグロの草稿。ライトゲープは同様の判断です。ホルン協奏曲草稿。同様。

ところで、ライトゲープはホルンソロ、ヴァイオリン、第 1 ヴィオラ、第 2 ヴィオラ、チェロのための五重奏曲 嬰二長調[ママ]についてはコピーを持っておりません。恐らく貴台がオリジナルをお持ちでしょう！

貴台のところで欠けているハーモニー音楽についてはヴラニツキーが当地にてシュタードラー兄弟あるいはヴェント氏からの報告をもたらししてくれるでしょう。

アイゼンあるいはアイツェンのようなお名前の未亡人、その方は国立劇場のホルン奏者の未亡人ですがホルンのオリジナルスコアをお持ちになっているに違いありません。ヴラニツキーが彼女を知っています。モーツァルトが彼女の夫にオリジナルの手稿譜を渡したのです」と述べている。

上記の情報からそれぞれの曲は K.412、K.371(279 小節)、K.494a、K.370b の一部、と推定される。ギークリングは新全集で、K.371 はロイトゲープのためではなくヴィーン宮廷楽団の第 2 ホルン奏者ヤーコブ・アイゼン(1756-1796)のために作曲されたとしている^{注1}。ギークリングはこの手紙に基づきアイゼンが持っていたものと考えたのだが、よく読むとコンスタンツェは K.371 のオリジナルを既に持っており、それをロイトゲープに見せたところ知らない曲だと言われたのだと読める。しかもアイゼン夫人が持っている筈のものはホルン協奏曲ではなくて、単に「ホルンのオリジナル」だと書いてある。むしろこれは K.487 を指すと考えられる^{注2}。また別の可能性として、コンスタンツェは確かにアイゼン夫人と面識がないが、モーツァルト自身が生前にアイゼンからオリジナルを返却されていたのではないかと指摘する向きがあるかもしれない。しかし、コンスタンツェの手紙のニュアンスではアイゼンは亡くなるまでモーツァルトのオリジナルを手元にきちんと保管していた人物のようである(モーツァルトに返却していないという意味)、ということアイゼン説には大いに疑問がある。

2. 曲の持つ特徴を知る

一方、ヘルマン・ユーリセンによればミュンヘンの《イドメネーオ》初演で 4 つの木管がオブリガートを奏するソプラノ・アリア"Se il padre perdei"を演奏したフランツ・ヨーゼフ・ラングがその候補とされる。このアリアとソロパートの扱いが似ているからという^{注3}。しかし、アラン・タイスの用紙研究によれば K.371 はモーツァルトがヴィーンで使用していた五線紙に書かれているため、ミュンヘンでの作曲開始はありえず、また、ラングがヴィーンに来ていたという情報もない(モーツァルトはオーボエ奏者ラムがヴィーンに居ることを知らせている。もしラングもいれば同様に知らせたであろう)。

今回提起のフランス語を話す相手に作曲したという説はどう説明されるだろうか。この曲は狩のロンドでなく舞曲風ロンドとなっている。フランス風と言えないでもない。但し、ヴィーンのオーケストラが演奏するのであるから、独奏者がフランスから客演したような

場合のみに限って議論されうる（オーケストラに常駐しているフランス出身のホルン奏者のためにフランス風ロンドで敬意を表することはないのであろう）。しかし、当時ウィーンにフランスからの客演ホルン奏者があったという情報はない。あればモーツァルトの手紙に書かれたであろう。ホルンの奏法がフランス風を要求していると言えればフランス出身のホルン奏者のために作曲したと言えるであろうがそのような特徴も見当たらない。

考えられるケースは、ホルン奏者はフランス出身ではないが、その主人がフランス出身あるいはフランス語を公用語にしている人物であり、モーツァルトはその人物から注文を受けて納付したという場合である。

3. モーツァルトの手紙の行間を読む

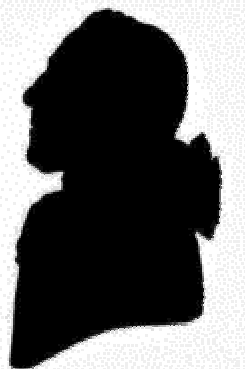
ここまで、各説を否定するのに何度かモーツァルトの手紙を使った。では、モーツァルトの手紙を肯定的に使い、この問題を解くことができるであろうか。

解明すべき項目を挙げてみよう。(1) 無償で作曲する筈がないので作曲は依頼されたと考えられる。しかし、待っていて注文が来たとは考えられず、また作曲報酬の交渉もあったに違いない。このような場面は手紙に書かれているのではないか。(2) ホルン奏者の技量、オーケストラの技量を確認するチャンスがあった筈である。これも手紙に書かれているのではないか。(3) 作曲が完了したとすればそれはどのような形で献呈されたのか、そして何故モーツァルトは初演の演奏会について沈黙を守っているのか。これは手紙には書かれていないが、話題を故意にはぐらかしているようなところで行間を読む必要があるかもしれない。

ウィーン到着直後のモーツァルトの行動を主に手紙から推定してみよう。

1781.3.16 (金): 朝 9 時、ウィーン到着。夕方 4 時に演奏会 (3.17 手紙)。場所は《ドイツ館》(3.24 手紙及び 4.11 手紙)、20 人の大貴族の前でチェッカレッリが演奏 (3.17 手紙)。大司教コロレドはモーツァルト、チェッカレッリとブルネッティにそれぞれ 4 ドゥカーテン支払った (4.11 手紙)。コロレドの老父君は名々に 5 ドゥカーテンずつ下さった (3.24 手紙)。この演奏会にガリツィン侯爵が来ていた (3.17 手紙)。

ドミトリイ・ミハイロヴィチ・ゴリツィン侯爵 (Fürst Dmitrij Michajlovič Golicyn。モーツァルトは Gallizin と表記) (1721[1720]-1793[1794]) は 1762 年から 1792 年までウィーン駐在ロシア大使であった^{注4}。この演奏会はコロレド大司教の命令で実施したものゆえ、ロシア大使が招待されたのは当然であったろう。侯爵は既に 1768 年に旅行中のモーツァルト一家のために大音楽会を邸で開催していた。また侯はウィーン西部に位置するヴィルヘルミネンベルク宮 (Schloss Wilhelminenberg) を 1784 年に購入し夏の住まいとするほど財力をほしいまにしていた^{注5}。



ドミトリイ・ミハイロヴィチ・ゴリツィン侯爵
(フランソワ・ゴノーによるシルエット、1781年^{注6})

1781.3.17 (土): ガリツィン侯爵のところに行く (3.17 手紙)。ブルネッティと同行するのがいやで時間をずらして一人で行く。着くや否やまっすぐに音楽室まで行き、侯爵と直接話をした。チェッカレッリとブルネッティはオーケストラの後ろの壁に寄りかかっていた (3.24 手紙)。

ガリツィン侯爵から大司教経由で要請を受けた演奏会に出演したと考えられるが、このチャンスに侯爵に直接作曲の売込みをしたものと思われる（お金にならない話をしたとは思えない。かといってこのときは就職の売込みまではしなかったであろう）。還暦を迎えていた侯爵はかつて12歳の子供だったモーツァルトが25歳になって再び訪問したことを歓迎したであろうが、その不躰さには驚いたことだろう。しかし音楽に造詣の深い侯爵が1曲注文したことは十分に考えられる。ここで次回(3.24であろう)の演奏会用に新作が依頼されたのではなからうか。オーケストラの力量を確認したモーツァルトはホルン協奏曲を作曲することに決めたのであろう。今まで経験したことのないホルン協奏曲を選んだ理由は、ミュンヘンでホルンソロの扱いに興味を湧いたため、そのチャンスを暖めていたのが、ここでホルン奏者の演奏を聴いて決断に移したということではなからうか。

ガリツィンのオーケストラのメンバーについては、以下のことが分かっているに過ぎない：「ヨーハン・ネポムク・フランツ・シュタードラーとアントーン・パウル・シュタードラー兄弟は1773年にウィーンの音楽芸術協会でソリストとして一緒にデビューしたが、その頃ガリツィンのオーケストラに雇われている。彼らは1779年にウィーン宮廷と無給の契約を結び1782年には有給の宮廷管楽(kaiserlichen Harmonie)団員となった。1787年になって彼らは宮廷楽団(Hofkapelle)に異動し、常勤のクラリネット奏者としてそれぞれ第1、第2奏者(アントーンが低い音を得意としたため)を受け持った。」^{注7}

この日は二人とも演奏に参加していなかったのだろうか？モーツァルトの目にとまった様子がない。その代わりとして、モーツァルトの眼鏡に適ったホルン奏者とは一体誰だったのだろうか。

1781.3.17(土)と1781.3.24(土)の間：シュタルツァー経由音楽芸術協会の演奏会への出演依頼あり早速承諾。しかし、主君の許可が必要との条件付与。(3.24-3.28手紙)

3.17の手紙に言及が無いので、これは1781.3.17(土)以降の出来事と考えられる。

3.24の手紙で新曲を作曲するとは言っていないので先走ってこのために新曲の着手をしたとは考えられない。

1781.3.20(火)：劇場でマラー夫人が演奏会を開催。夫は姿を見せなかった筈(3.24-3.28手紙)

モーツァルトはこの演奏会に参席していない。

1781.3.21(水)：ウィーンで1781.3.16以降にウィーン製の五線紙に最長5日間で作曲されたK.371は、管弦楽部が未記入のままこの日に完成日と署名がフランス語で記入された。

侯爵の注文を受けたモーツァルトはウィーン製の五線紙に協奏曲を構想したが短編期ゆえ無理となり、単独楽章のロンドを書き下ろすこととした。狩のロンドでなく舞曲風のロンドを選んだのは単独楽章のためと考えられる(第1楽章がK.370bなのかどうかは別途議論が必要。仮にそうだとするとK.370bとK.371を続けて復元演奏することは差し控えたい。なぜならモーツァルトは第2楽章をも構想していたかも知れず、その場合フィナーレは狩のロンドになっていたかも知れないからである)。279小節のロンドの独奏部を書き上げたモーツァルトは納期を過ぎてしまった穴埋めに、写譜の効率を上げる手としてオーケストラ部分を自らパート譜で仕上げ、この日に曲が完成。ホルンの独奏パート譜として使われることになった草稿譜面にはロシア出身の侯爵の公用語であるフランス語で署名し、オーケストラパート譜とあわせて納付した。

1781.3.24(土)：

音楽芸術協会の演奏会に出演できれば協奏曲ではなく、プレリュードとフーガ、そして「私はランドール」による変奏曲を弾きたいと手紙に書く。しかしコロレードはモーツァルトが音楽芸術協会の演奏会へ出演する許可を与えていない(3.24手紙)。

きょうはガリツィン侯からチェッカレッリに歌を所望。この次は私の番になるでしょう(3.24手紙)。

ガリツィン邸での演奏会があり、侯からはチェッカレッリの参加が要請されたということである。もちろん大司教の許可を得たことであつたらう。実際にはモーツァルトも要請されていたがモーツァルトとしては：「大司教に許可を得ず注文を受けた K.371 が初演される演奏会にこともあろうに大司教が出席する。その演奏会に自分は出席すべきではない。しかし、レーオポルトに事実は言えない。欠席の理由を侯が今回はチェッカレッリを所望し、自分は次の番になると含みを持たして報告しておこう」ということで欠席したのではなからうか。

ガリツィン邸の演奏会でシュタルツァーが貴族皆と一緒に大司教をつるし上げ、音楽芸術協会の演奏会へのモーツァルトの出演許可を出させた（3.28 手紙）。

恐らく、大司教は K.371 が演奏されるのを聴いて烈火のごとく怒つただろう。しかし、それは寧ろシュタルツァー達が大司教をつるし上げるのに追い風となつたとも考えられる。

今夜はクラヴィアの熱烈な愛好家だという宮中顧問官のブラウン氏のところへ行く（3.24 手紙）。

これは演奏会ではないようである（演奏会は 3.28 にある）。ガリツィン邸へ行かないことの穴埋めであるとすればうまくアポが取れたものだ。

手紙の最後にロイトゲーブ、ラムからよろしくとある（3.24 手紙）。

ミュンヒェン在住のラムはヴィーンを訪問中だったようである。

1781.3.28（水）：ブラウン男爵邸の演奏会に出掛ける（3.28 手紙）。

1781.3.28（水）と 1781.4.3（火）の間：モーツァルトの交響曲（K.297 あるいは K.338）の試演を少なくとも 2 回実施。2 回目はボンノ邸にて（4.11 手紙）。

1781.4.3（火）：音楽芸術協会（未亡人協会）の演奏会が開かれる（4.4 手紙）。広告によればケルトナートーア劇場（皇王室専用劇場）でモーツァルトの交響曲（K.297 あるいは K.338）、独奏曲（おそらく変奏曲「私はランドール」K.354）が演奏された。

1781.4.4（水）：これまでに劇場の演奏会で手に入れられる筈だった 100 ドゥカーテンを失った（4.4 手紙）。

逆に参加できた演奏会は全部手紙で報告してあると考えてよいだろう。

1781.4.8（日）：

ドイツ館での演奏会。プルネッティのための協奏曲ロンドー（K.373）、ヴァイオリン伴奏付ソナタ（K.379 あるいは K.380）そしてチェッカレッリのためのロンドー（K.374）の 3 曲を新作した（4.8 手紙）。大司教からの手当てがまだ出ていない（4.11 手紙）。

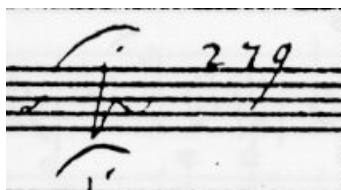
ミュラー・フォン・アゾウはケッヒェル目録の中でこのとき K.371 も演奏されたとしているがモーツァルトが新作は 3 曲とはっきり述べているので根拠がない。これら新作のオーケストラ曲が K.371 と同様すべてロンドーであるのは作曲時間の制約からであると考えられる。ヴァイオリン伴奏付ソナタはピアノパートが書き込めなかったので暗譜で演奏せざるを得なかったと報告されている。

その後：

1781.3.24（土）を最後にガリツィン邸の演奏会について報告が途絶える。大司教との訣別やコンスタンツェとの結婚準備、《後宮からの誘拐》の台本入手など多忙になるためである。

上記以外の演奏会で作曲者がピアノ伴奏で K.371 の初演に臨んだという仮定も、モーツァルトが自由に演奏会に出席できなかったことや、手紙にそのような演奏会への言及がないことなどから成立し難い。

自筆譜の最終小節の後ろに 279 という数字が書かれている^{注8}。2 と 7 は全くモーツァルトの筆跡と同一と思われ、9 にはいささか疑問が残るが全体をモーツァルトの筆跡だとしてよいであろう（新全集ではこの数字に言及なし）。



自筆譜の最終小節の後^{注9}



モーツァルトの筆跡。左から2、7そして9を参照^{注10}

モーツァルトがオーケストラのパート譜を作成するときに自身で小節数をチェックした
ものと思われる^{注11}。

ソロパート譜の代わりとしての位置付けとなった草稿スコアは初演後オーケストラの管
理からすり抜けてホルン奏者の移籍と共にガリツィン侯爵の館を離れていったものと考え
られる。そしてソロパート譜は恐らく奏者自身により筆写されて使用に供されたため、あ
る時点でオリジナルがモーツァルトのところに返却されたものだろう。それが1800年
にはコンスタンツェの手元にあったのだ。だがその後何故かヘンケルが枚数を記入したとき
にはバイフォリウムが紛失してしまっており、ケッヒェルやヤーンは60小節が欠けてい
ることに気付かずコピーしてしまったのである(60小節は1989年に再発見された^{注12})。

4. 候補となるホルン奏者の絞り込み

ホルン奏者はシュタードラー兄弟のように後にヴィーン宮廷楽団^{注13}に雇われたという
可能性が高い。しかしその場合でも無給・有給の期間、非常勤・常勤の期間がすべてはっき
りしない限り一見両オーケストラへ掛け持ち出演しているかのごとくに見える期間もあり
うと思われる(シュタードラー兄弟の例から掛け持ちが許されていたとも考えられる)。
そのことを前提としてデクスター・エッジの論文とホレース・フィッツパトリックの論文
から当時ヴィーンの宮廷楽団で活躍していたホルン奏者の名前を挙げてみる。

エッジはブルク劇場宮廷楽団(Burgtheater orchestra)の帳簿を調査した。

「1776年から少なくとも1800年までの間、ブルク劇場宮廷楽団は有給のホルン奏者の
ポジションを2名分だけ保有していた。但し《後宮からの誘拐》が初演された1782/3年
の帳簿には例外的に4人の奏者が挙げられ各人に年俸350グルデンが支給されている。

スキナー(Skinner) : 1776年~1778年あるいは1779年

モルナー(Molner) : 1776年~1778年あるいは1779年

アントン・スクンヴァネク(Anton Scrvanek) : 1779年~1782/3年

ヨーゼフ・ロイトゲーブ(Joseph Leutgeb) : 1779年~1782/3年

マルティン・ルップ(Martin Rupp) : 1782/3年~1790年代

ヤーコプ・アイゼン(Jacob Eisen) : 1782/3年~1790年代

劇場のいくつかの帳簿は補充ホルン奏者への支払いを記録している。また、給料リスト
が示しているよりさらに頻繁にオペラでは4つのホルンが使われたであろう；この疑問は
更なる調査が必要であることを意味している。

劇場のオーケストラの状況についてはシーズンごとに以下のように纏められる。

1782/3年まで：ジングシュピール用オーケストラ。

このシーズン末にジングシュピール団が解散した。

1783/4年：イタリアオペラ用オーケストラに転身(人員の若干の変化のみ)。

1785/6年~1787/8年：ジングシュピール団が再導入されたためジングシュピール用に第
2オーケストラがケルトナートーア劇場に新設され、イタリアオペラ用ブルク劇場のオ
ーケストラと共存。

1787/8年：シーズン末にジングシュピール団とそのオーケストラが解散。

1788/9 年～1790/91 年：イタリアオペラ用オーケストラが残る。
1791/2 年以降：オペラ用オーケストラとバレエ用オーケストラを同時に運用^{注14}。
フィッツパトリックはホルン奏者の生没年と活躍期間とを示している。

「アントーン・スキズヴァネク (Anton Skizuwaneck) :

ウィーン宮廷楽団 (Hofkapelle) の第3ホルン代理 1775 年～1799 年

マルティン・ルップ (Martin Rupp) (1748-1819) :

ウィーン宮廷楽団 (Hofkapelle) の第1ホルン 1782 年～1806 年

ヤーコブ・アイゼン (Jacob Eisen) (1756-96) :

ウィーン宮廷楽団 (Hofkapelle) の第2ホルン 1787 年～1796 年

ヨーゼフ・フランツ・ザーラドニチェク (Joseph Franz Zahradniczek) :

ウィーン宮廷楽団 (Court Orchestra) の第3ホルン 1787 年～1820 年以降^{注15}。

エッジのデータと合致しないのは前述したように無給の期間や活動の休止期間などがあるためと考えられる。さて、ロイトゲープとアイゼンは既に候補者たり得ないが、ルップが 1782 年に宮廷管楽団のメンバーになる前にエステルハーゼ侯爵の首席ホルン奏者であった^{注16} とのことゆえ除外すると、スキナー、モルナー、スクンヴァネク (スキズヴァネク) そしてザーラドニチェクが残る。このうち第3ホルン奏者はソロ演奏の候補ではないかも知れないが取り敢えずこの4人を候補としておく。あくまでもガリツィンのオーケストラが独自の陣容でホルン奏者を抱えていなかったという仮定の下にはあるが。

注1 : NMA V/14/5, Kassel etc. 1987, pp. X and XVI.

注2 : Herman Jeurissen: *Fragen und Hypothesen in bezug auf die erhaltenen Manuskripte der Mozartschen Hornkonzerte*, in MJB 1991 Kassel etc., pp. 930-937.

注3 : Herman Jeurissen: 同上

注4 : W. A. Bauer / O. E. Deutsch / J. H. Eibl (hrsg. von): *Mozart. Brief und Aufzeichnungen. Gesamtausgabe*, 7 Bde., Bärenreiter, Kassel etc., 1962-1975. Kommentar 1212/199-200.

なお、別人のドミトリー・アリクシェイヴィチ・ゴリツィン公爵 (1739-1803) は 1763 年から 1768 年にかけてパリ駐在のロシア大使であり、1764 年にはパリ滞在中のモーツァルト一家と懇意になっている。海老澤敏・高橋英郎編訳『モーツァルト書簡全集』全 6 巻、白水社、1976 年～2001 年の第 6 巻 p.346 では二人の扱いが混乱しているので注意。

注5 : ヴィルヘルミネンベルク宮については

http://www.burgenkunde.at/wien/w_schloss_wilhelminenberg/w_schloss_wilhelminenberg.htm を参照。ここではガリツィン侯爵の没年を 1793 年 9 月 30 日としている。

注6 : O. E. Deutsch (vorgelegt von): *Mozart und Seine Welt in Zeitgenössischen Bildern*. NMA X:32, Bärenreiter, Kassel usw., 1961

注7 : Stanley Sadie (ed.): *The New Grove Dictionary of Music and Musicians*, 20 vol. London, Macmillan Publishers Ltd., 1980.

注8 : Hans Pizka: *Das Horn bei Mozart*. Munich, Hans Pizka Edition, 1980.

注9 : Hans Pizka: 同上

注10 : Daniel N. Leeson: *Mozart and Mathematics* in MJB1999, Bärenreiter, Kassel etc., 2000. p.29

注11: Marie Rolf: *A New Manuscript Source for Mozart's Rondo in E-flat for Horn, K.371* in MJB 1991, p.939. かつて 279 を 219 と読むべきだとの議論もあった由。もちろんモーツァルトの 7 を 1 と読むことができないのはファクシミリから明らかである。

注12 : Marie Rolf: 同上 p.938

注13 : 宮廷楽団 Hofkapelle (court orchestra) とは具体的にはブルク劇場 (Burgtheater, k. k. Nationaltheater あるいは k. k. Nationalhoftheater) 及びケルトナート - ア劇場 (k. k. Hoftheater nächst dem Kärntnerthore あるいは Kärntnerthor-Theater) のオーケストラを指す。

注14 : Dexter Edge: *Mozart's Viennese Orchestras* in *Early Music*, Vol. 20, No. 1 (Feb., 1992), pp. 63-65+67-69+71-88 から編訳。

注15 : Horace Fitzpatrick: *The Horn and Horn Playing and the Austro-Bohemian Tradition from 1680 to 1830*. London, Oxford University Press, 1970.

本稿では Kayla Nelson の <http://www.hornhistory.com/performers.htm> から編訳した。

注16 : Roger Hellyer : *The Transcriptions for Harmonie of Die Entführung aus dem Serail*. in *Journal of Royal Musical Association*. 1975; Vol.102: pp. 53-66

(改訂 2007 年 10 月 27 日)